

世界基準の“生きる教育”を、地域の日常に。

富山の女性たちが育てる未来

特定非営利活動法人

ハッピーウーマンプロジェクト

国内で唯一、幼児から大人まで一貫した性教育プログラムの構築を目指し、富山県内各地でセクシュアリティ教育の実践を続けている

NPO法人「ハッピーウーマンプロジェクト」。

産婦人科に「行きづらい」と感じた女性たちの疑問から生まれたこの団体は、行政と連携した授業や講演の実施、

駅構内自由通路で心身の悩みを気軽に話せる窓口の設置など、

多層的な活動を進めてきた。全国的に性教育が後退した2000年代の

“性教育バッシング（バックラッシュ）”のさなかでも、

歩みを止めなかったハッピーウーマンプロジェクトがこれから挑むのは、

科学的根拠に基づいたユネスコの「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」を、

日本の現場でより使いやすくブラッシュアップした教材づくりだ。

地域に生きる大人たちが、性や生について安心して語り合える環境を整える――。

その延長線上にこそ、彼女たちの目指す未来がある。

大人こそ性教育の「学び落とし」

「これから生きる子どもたちには、どうか『自分の心と体を大事にできる人』に育ってほしい。そして性別を問わず、自分らしい人生を生きてほしい。私たちは、そんな思いでセクシュアリティ教育を始めました」

2025年8月下旬、富山県南砺市の「幼児期からの生きる学び事業」の一貫として行われた研修「ぐるーいんぐあっぷ講座」で、参加した保育士や教育関係者約50人が熱心に耳を傾けていた。講師を務めたのは、ハッピーウーマンプロジェクト理事で公認心理師の小林涼子さんだ。

同団体には、女性の健康やDV、性暴力に関する相談が年間約2500件寄せられる。小林さんは、子どもたちと接する大人に持ち帰ってほしい知識について、丁寧に説いた。「私たちは、毎日多くの女性の相談を受けています。だからこそ、傷つく前に知ってほしいことがあるのです。まずは、自分の権利を守ることに。それと同時に、人の権利を奪わない（加害しない）こと。今日は、健全な発達が阻害されてしまう子どもたちのことについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています」

研修には、虐待・マルチトリートメント（不適切な関わり）など子どもの権利に関することから、大人自身も固定観念のある性的同意や、ジェンダーロール（性役割）を巡る言説などを盛り込んだ。例



ぐるーいんぐあっぷ講座で熱心にディスカッションする参加者

えば、「女性の幸せは結婚し子どもを持つことだ」、「男性は家事をしなくてもよい」、「女性は感情的で、男性は論理的である」など――。小林さんは続ける。「これらが、根拠のない偏見の一例です。自分が言われて嫌だったことや、周囲で見聞きした偏見の言葉について書き出してみよう」。会場には、身近に潜む偏見や差別、そして自らの過去を見つめ直す静かな時間が流れる。

「根拠のない思い込みや偏見は、大人である私たち自身が、すでに身に付けてしまっているものです。だからこそ、偏見に気づき、学び落とすことが大切なのです」。小グループに分かれた参加者たちは、体験を語り合いながら、それぞれの立場からできることを探っていた。会場には、次第に前向きな対話の熱が満ちて

いった。

研修を受けた保育士の女性は、「自身が性教育を受けたことがなかったのだ、意識していなかったし、最初は戸惑いもありましたが、性別に基づく差別・偏見が内在化していたことに気付きました」と振り返る。園の中では、女の子はピンク、男の子は青と色分けをしてしまっていることもあると言い、「子どもたちへの声掛けについて、本当にこれだけののか、と考え続けていきたい」とうなずいた。

これまでの研修では、プライベートパターや他者との境界線（バウンダリー）をテーマにしたこともある。その中には、「子どもが（性器や妊娠・出産などについて）知りたいと思うのは自然なこと。ごまかしたり、叱ったりしてはいけない。どう伝えたらいいのかわからない。



富山県、「国際セクシュアリティ教育ガイダンスに基づく、セクシュアリティ教育プログラム(教材・資料)の作成と人材育成」

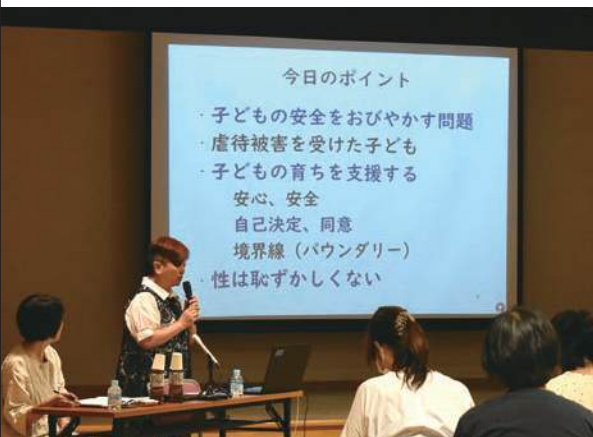
<https://happy-woman-project.net/>



(左から)木村なぎさん、小林涼子さん
(2026年2月9日最終発表会参加者)



ハッピーウーマンプロジェクトの小林涼子さん



ったのでとても勉強になった」、「大人や親の性に対する意識を見直したり、自覚したりすることが必要だと思った」など、自分の中の思い込みや経験を省みる声も上がっていた。

南砺市で始まっている幼児教育

ハッピーウーマンプロジェクトによるセクシュアリティ教育の取り組みは、2007年に始まった。最初は児童養護施設の未就学児・高校生向け出前授業から、職員・大学生・障害福祉領域へと波及し、2024年度は県内40カ所で研修を行った。

ハッピーウーマンプロジェクトが学校で授業を始めた当初は、県の厚生センタ―を通しての依頼が中心であったと、小林さんは言う。当時、厚生センターの事業であった「ヤングヘルスセミナー」の中に、ハッピーウーマンによる性教育も加わることができたのだ。そうした経緯から、性教育やコミュニケーションに関する講座の依頼が、特に県西部の学校を中心に広がっていった。これが、学校現場での活動が本格的に始まるきっかけとなった。

その後、国から県、県から市町村へと事業が段階的に移譲される流れの中で、南砺市が手を挙げた。市独自の事業として「市内全ての中学校で特定学年に性教育を実施する」体制を整え、現在は、小学5年生の授業を地元の助産師が担当



し、中学1、2年生をハッピーウーマンが担当している。2025年度からは4年間かけて、市内の保育園や幼稚園で年中児を対象にした講座も始動する。南砺市とは10年近くにわたって継続的なパートナーシップを続けているが、このようにセクシュアリティ教育について自治体为主导し、幼児・小学生・中学生と段階的に実施しているケースは、全国でも珍しいという。

南砺市総合政策部こども課長兼こども家庭センター長の山田千佳子さんは、こうした講座で「普段子どもと関わっている先生方に、現場で生かせる取り組みを学べる機会をつくることができればいいなと思っています」と話す。同市で2023年から施行された「南砺市こどもの権利条例」を踏まえて、「いじめや虐待などの相談件数は市内でも増えている、問題が認知されるようになってきて

います。子どもたちを守るためにも、幼少期から自分の体と心を大事にすることへの気付きが得られるといいのではないのでしょうか」と期待している。

教室の外へも広がる支援の形

「子どものSOSを聞ける場所が、もつと身近に増えたなら」。そんな思いから、ハッピーウーマンプロジェクトでは地域の人々に向けたアクションを続けてきた。身近にいる人たちに性や人権の知識を広げていくことが、地域全体で子どもや女性の声を受け止める基盤になると考え、2022年に始めた「駅ナカ保健室」では、産婦人科医をはじめ、医師・助産師・カウンセラーなどが定期的に集い、誰でも気軽に体や心の悩みを相談で



ハッピーウーマンプロジェクトが行っている事業のリーフレット

きる場を開いている。学校や医療機関で相談することへ敷居の高さを感じている若い世代にとって、駅という「いつもの通り道」にある安心の場所は、支援の入り口となっている。

なぜ、こうしたアウトリーチが大切なのか。性や健康に関する悩みは、往々にして「相談に行く」こと自体がハードルになる。家庭や学校、医療機関のどこにも話せない人にこそ、支援を届ける仕組みが必要だ。だからこそ、「来るのを待つ」のではなく、「出ていく」支援を通して、地域の誰もが安心して自分の体と向き合える環境づくりを進めている。

美容室から始まる、

地域のSOSネットワーク

特に、困難を抱えやすい女性にリーチできる、「美容室」という場の可能性にも着目した。富山県は全国的にも「働く女性」が多い地域だ。だからこそ、美容室の数も驚くほど多い。「富山の女性はみんなよく働いているけれど、自分のためにぜいたくするというより、家計を支えるために働いている人が多い。だから『自分のお金』として使えるのが、美容室なんです」と、小林さんは言う。

月に一度、あるいは季節の変わり目ごとに訪れる美容室。髪を切りながら、何気ない日常の愚痴や家庭の悩みをこぼす。そんな会話の中に、SOSのサインが潜んでいることも少なくない。ハッピ

ーウーマンプロジェクト理事の木村なぎさんは、「もし美容師さんたちが、(ジェンダーやDVなどに関する)ちょっとした視点を持ってくれたら、困っている人をいち早く専門家につなげられるはず」と確信する。美容商材を扱う地元企業とも連携し、美容室向けの研修や啓発講座を企画してきた。地域に根づく場所を通して支援を広げる。その発想は、富山の暮らしのリアリティーから生まれたものだ。

婦人科への懷疑から生まれた声

富山県で、こうした継続的な性教育や、それにまつわる活動が行われてきた背景には、約20年前の女性たちの声があ



最終発表会団体報告の様子



った。

始まりは2004年5月。「私たちの行きやすい婦人科をつくろう」という合言葉のもと、医師や看護師、カウンセラー、会社員、主婦など、立場も年代もさまざまな女性たちが集まったのが出発点だった。発起人の一人だった小林さんは、こう語る。

「20歳前後からずっと、自分が納得して通える産婦人科を探していたんです」。その思いの根底にあったのは、多くの女性たちが抱いていた医療現場での違和感だ。「診察のたびにカーテンを閉められるのが嫌だったんです。自分の身体のことなのに、なぜ遮られなければならないのか。また、待合室から診察室に入り、また待合室に出てから内診室へ」という「他患者に見られる導線」も嫌だ、といった声も上がりました」

当時は、富山県内の女性たちが集まり、語り合いながら、「患者の視点から見た婦人科のあり方」について話し合う会だった。「突然、写真を撮られて嫌だった」、「何の説明もなく、検査だけが進んでいった」。婦人科に対して、不信感を抱いていた女性たちで勉強会を重ね、海外の医療現場も視察しながら、意見を持ち寄って形にしていた。

元々学生時代に心理学を学んでいた小林さんだが、首都圏で全く異なる職業に就き、家族の都合で富山へ移住することになったのが転機となった。「富山に来て初めて、自分の体を任せられると思う

角的視点から学ぶ包括的性教育を実施していたが、「まだ不足している」と感じていた点を埋めるものとして、ユネスコなどが発行した「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」に可能性を感じた。小林さんは、初版を読んだ当初、現場の実感とどこか「ずれ」があり、完全にはふに落ちなかったという。しかし、2018年の改訂版で女性の視点やジェンダー平等の観点が強化されたことで、「これはやるべき教育だ」と確信を持つようになった。

ハッピーウーマンプロジェクトがYUIみらいプロジェクトに応募したのは、この国際ガイダンスを基に教材、そしてそれを使ってもらうための仕組みを開発するためだった。応募以前から地域での性教育実践は積み重ねていたものの、それらを体系化し、次の段階へ進め



ハッピーウーマンプロジェクトの木村なぎさん

医師と出会いました。これまで学んできた心理学や、私自身の過去の経験を生かして、いつか産婦人科に相談室を設け、女性支援の入り口をつくりたい、と思ったんです。それからまもなく、メンバーの思いを取り入れた新しい病院が開かれる。仲間とともに学び、語り、共感する時間を通じて、「私たちの問題は、私たち自身で変えられる」という確かな手応えを得た。

一方、かつて都内の産科病棟で助産師として働いていた木村さんは、現場でDVや性被害などがある事例を知り、体の知識を社会に伝える必要性を痛感した。その経験から、こう振り返る。「正直、病院の中だけでは限界があると思うんです。体のケアはできても、社会的・精神的なケアまで対応できない。だから

るための契機となったという。

同団体ではまず、現在の講座内容を、ガイダンスが示す8つの領域（人間の発達、ジェンダー、暴力と安全など）に照らし合わせてみた。すると、国際ガイダンスが示す方向性とおおむね一致していることがわかった。小林さんは言う。

「私たちがやっていたセクシュアリティ教育の方向性が間違っていないことはわかったのですが、例えばノーと言うことを教えるには、幼児期から教育を進める必要があります。今の日本の教育を考えると、ゴール到達は難しいんです」

そこで、「自分たちの講座をバージョンアップさせる」ことを目的にするのではなく、視点を変えて、「ほかにできる人を増やし、学校や地域などさまざまな場所で独自に実践できる仕組みをつくっていいこう」という方向に発想を転換した。

だれもがその人らしく、生きていくために

現在は、保育士・助産師・教員などの専門職を対象にした指導者養成を軸に、地域に根ざした協働チームを「自走型」へと育てていくことを目指している。ハッピーウーマンプロジェクトのメンバーがいなくてもできる仕組みをつくれれば、さらに多くの地域でも実践していけるからだ。モチベーション設計やファシリテーション支援には、外

こそ、NPOとして社会啓発を進めていけたらと思いました」。病院という箱だけでは、十分とは言えない。ならばソフト面を充実させていこうと、2006年5月、NPO法人ハッピーウーマンプロジェクトが誕生した。

途切れさせなかった富山の性教育

団体設立後は、女性の健康や生き方を支える活動に加え、性教育や人権教育にも力を注いできた。2000年代に入ると、国内では性教育への「行きすぎ」批判が相次ぎ、自治体や学校で授業が中止・縮小される動きが広がった。こうした性教育バッシングの中、首長のもとへ赴き、「性教育をやめないでほしい」と訴えた団体メンバーもいた。その結果、富山県では性教育の実践が途切れることなく継続されてきた。

厚生労働省「衛生行政報告例（令和6年度）」によると、15〜19歳女性の人工妊娠中絶件数は全国で女子1000人当たり約4件。一方、富山県は約2.5件と、全国平均の半分程度の低い水準を示している。地道な教育の積み重ねが、地域の若い世代の行動や意識の変化を確かに支えている。

国際ガイダンスへの確信と広がり

ハッピーウーマンプロジェクトでは元々、性を体・心・人権・関係性など多

部専門家の力も取り入れる予定で、市町村との連携によって、学校の内外を横断した「面での展開」、そして最終的には、生まれる前（妊娠時）から大人まで、全ての人が学べる機会や仕組みを作っていくことも構想している。こうしてできた「富山型」の生きる教育の実例は、北陸から全国へと展開していく可能性を秘めている。

ぐろーいんぐあっぷ講座は、特別な授業だけでなく、日常の中の言葉や振る舞いの中にこそ息づく。例えば、子どもがふとした質問をしたとき、先生がどんな言葉で答えるか。その一言一言が、子どもの世界を形づくる。だからこそ、教師や支援者自身が学び、変わることが、最も持続的な包括的性教育の形である。小林さんはこう語る。「先生が変われば、子どもたちも変わる。その影響は何年も続いていくんです。国際ガイダンスが示す教育を、現場でつないでいけることほど価値のあることはないと思っています」

まずは、地域の土壌を作っていくことからだ。セクシュアリティ教育、そして包括的性教育を、ただの「教科」ではなく、自分や他者を大切にするに当たって必要な「学び」として根づかせ、多世代の地域の人たちがその人らしく生きられるように。そう願う女性たちへの共感、富山から他地域に、そして次世代へと自然に、しかし確実に広がっていくだろう。